

ふるさと再発見

第13代島原城主 松平 忠馮公（1771～1819）

松平忠馮公は、忠恕公の六男として1771（明和八）年に誕生しました。忠馮公が正室との間に生まれた子であったために、六男でありながら世継ぎとなりました。

前回ご紹介したように忠恕公が寛政地変の直後に急死してしまいます。そこで急遽、忠馮公が家督を継ぐこととなりました。

忠馮公はまず、喫緊の課題である災害復興に取り掛かります。幕府から一万二千両を借用しましたが、復興資金は足りず、銀札を発行することになりました。

しかし銀札の発行はインフレを起こしてしまい、領内に儉約を命

じ財政緊縮化を図ることになります。一方で、生蠶の生産・販売体制を整え財政再建への取り組みとしました。

1793（寛政五）年には、先魁に稽古館を設置。朱子学に精通する岩瀬勘平を教授として、藩士子弟を学ばせるなど藩学の振興にもつとめました。

現代の災害復興において慰霊碑が建立されるのと同様、忠馮公も、亡くなった人々を弔うために「流死菩提養塔」を領内7ヶ所に建立しました。加えて、本光寺副住職の多福軒には高島回向堂の建立を命じました。回向堂内にはここに埋葬された流死者278名の戒名が記された「流死永代施餓鬼牌名」が安置されています。

未曾有の大災害と財政健全化を目指した忠馮公は、藩政改革が結実しつつある、1819（文政二）年に48歳で亡くなりました。

地域おこし協力隊 吉岡 慈文
 （出典：『長崎県の歴史』藩政編）



「流死永代施餓鬼牌名」
 高島回向堂内

地域おこし協力隊コラム

協力隊、なんしよっと？

地域おこし協力隊 上田 友

島原で変わりゆく季節を感じる日々は久しぶりです。

島原を離れ、幾つかの地域を訪れました。それぞれの場所には、それぞれの風景があり、それもまた良いと思いつつも、島原らしい風景の良さをあらためて実感します。例えば、眺める場所によって違う表情の眉山と普賢岳、九十九島がある有明海、「ガタンゴトンフォーン」と走る黄色い島鉄列車、フェリーの汽笛、あちらこちらから聞こえる湧き水の音などです。これらが私の大切な風景であり、島原の大地と人の物語なのだと感じます。

長い間、福岡で過ごし、帰郷したからこそ知る島原があります。生活の場と、観光の場がある島原、それをつなぐ島原鉄道。この沿線地域に足を運び、人と出会い、会話をし、知ることがあり、そこに伝えたい今の島原があります。

この想いを、手描きマップを活用して紹介したく、現場取材をさせてもらうなか、皆さんに共通するのは、地域をより良い場所にするため、自分自身が関わっていることにさりげなく誇りと愛着をもっていることです。地域に「喜び」と「笑顔の集う場」づくりを指し、私も地域の一員として関わり、島原を再発見して活性化に取り組んでいきます。



これからも多くの人と出会う機会をつくり、上質な時間を過ごしたいと思えますのでよろしくお願ひします。

▼問い合わせ先 政策企画課
 ☎08012

